#### 資 料

## ヤナギ属シダレヤナギ節の分類学的問題点の整理

山口純一1)

# Discussion on taxonomical issues on the Sect. *Subalbae* of the genus *Salix*

Junichi Yamaguchi 1)

#### 要旨

日本のヤナギ属を学ぶうえで、シダレヤナギ節の種の認識の難しさがときに問題となる。その一つは広義のシダレヤナギ(イトヤナギ)に関わることで、枝が長く枝垂れる樹形から枝垂れない樹形までが連続的に生育するため、枝垂れないタイプは同じシダレヤナギ節のコゴメヤナギとよく似る場合がある。このような両種の識別は熟練を要することから、両種ならびに類似種であるシダレコゴメヤナギ、シロシダレヤナギ、コブヤナギなどを対象とし、主要な文献の記述を整理して考察をこころみた。結果は以下のようである。ココゴメヤナギとシダレヤナギを識別するための実用的な考え方をまとめた。分類上の検討要件を満たさない種がある。シロシダレヤナギなど交雑が疑われる種についてはより慎重な同定が求められる。広義のシダレヤナギ(イトヤナギ)は典型品ごとに分けられてきたが、この細分は分類上の混乱の要因となる。枝垂れない個体に対するシダレヤナギの呼称は樹形に相応しないことから、広義の Salix babylonica L. に対し「イトヤナギ」を和名として使用することを提言する。

**キーワード:** コブヤナギ, コゴメヤナギ, イトヤナギ, シダレコゴメヤナギ, シダレヤナギ節, シロシダレヤナギ.

## はじめに

自然繁殖する広義のシダレヤナギ(イトヤナギ)Salix babylonica L. は、枝が長く枝垂れるものから、枝垂れないものまで連続的な変異が知られており、「枝垂れ柳」とはよべない樹形のものもみられる。先人による研究では狭義のシダレヤナギ(植栽の標準タイプ)が主に取り扱われ、いくつかの品種等の解説があっても検索表には反映されないことが多い(北村、1979;大井、1983;木村、1989)。同じシダレヤナギ節 Sect. Subalbae Koidz. に所属するコゴメヤナギ S. serissaefolia Kimura の標準的な形状は、小枝が太く

て枝垂れないが、飯沼慾齋が草本図説中でコブヤナギとよんだような枝先が多少枝垂れるタイプ(飯沼、1832)も野外にはみられ、枝垂れが少ないシダレヤナギとの区別がはっきりしなくなる.

枝が長く枝垂れる形状を示すシダレヤナギの葉身や葉柄の長さは、コゴメヤナギより長く、葉はやや薄質でまぎれることは少ない。しかし、ほとんど枝垂れないタイプや、短く枝垂れるタイプの葉形や葉質はコゴメヤナギの葉によく似ているため、葉だけでの区別は難しくなる。このため両種が多く混在する関東地方などでは、コゴメヤナギとコゴメヤナギに樹形が酷似するシダレヤナギの区別は熟練を要し、ときに交雑個体があることも視野に

<sup>1)</sup> 植物検索研究会 〒 177-0045 東京都練馬区石神井台 5-25-25 Plant reference research team: Syakujidai 5-25-25 Nerima-ku, Tokyo, 177-0045 Japan

入れなければならず、先人によるヤナギ類の研究にはさまざまな検討の跡が見られる。例えば、日本のヤナギ類の体系的分類により多大な貢献をした木村有香博士(東北大学教授)は、半世紀に及ぶ研究を重ねた上でシロシダレヤナギ Salix lasiogyne Seemen を、コゴメヤナギとシダレヤナギとの自然雑種由来だと推定している(木村、1984b)。

コゴメヤナギに似る種としては、同じシダレヤナギ節に属するヨシノヤナギ Salix yoshinoi Koidz. やシロヤナギ Salix jessoensis Seemen がある. ともに高木で枝は斜上し、成葉は披針形で樹形や葉形はよく似ている. ヨシノヤナギは近畿地方から中国地方、および四国に分布し、生時の葉の裏面は淡緑色でときに光沢があり、葉の裏面が帯白色となるコゴメヤナギとは異なる. シロヤナギは北海道、東北地方、北陸地方、関東地方北部に分布し、子房に密毛があり、子房の基部に毛が少数散生するか無毛であるコゴメヤナギとは異なる. コゴメヤナギは関東地方、中部地方、近畿地方に分布し、木村(1989)によれば、シロヤナギに近い種類であるが、おもに花穂が小さいこと、子房の毛はあっても基部のみであること、成葉が小さいことなどで区別され、分布もまた異なると述べている.

コゴメヤナギと広義のシダレヤナギ (イトヤナギ) に 関連すると考えられる種 (品種) を一覧にした (表 1). 本稿では、これらについての主要な文献における該当部分 (概要に関する記述・葉・枝・雌花の苞・子房の形状など) を引用してとりまとめ、それらについての考察をこころみる. なお、飯沼 (1832) の出版年については、北村 (1977)では 1865 年未出版が適当とされているが、ここでは国立国会図書館デジタル資料で用いられている出版年 (1832) を仮に採用する.

## 各文献の記載

(『』内は引用部分、【】内は著者注記を示す.)

#### (1) コブヤナギ

飯沼 (1832)『水畔ヲ必トセズ、山麓原頭亦往々コレアリ、全形垂柳二似レドモ喬高更二加リ、枝條繁密、質垂柳ノ如ク脆フシテ折レ易ク、葉大キカラズ、遠ク望メバ頗ル垂柳ノ態アレドモ、垂柳ノ枝條長ク下垂スルガ如クナラズ、又枝上二瘤ヲ生ズルコト垂柳ヨリ多シ、故ニコブヤナギノ名ヲ得、【後略】』. (読点を付加)

木村(1984a)は飯沼(1832)におけるコゴメヤナギ・コブヤナギについて、一部を要約すると次のように記述している。『これらの記述を勘校するにコゴメヤナギの「葉梢細ニシテ枝條垂下ノ態ナシ」とあるはまことに簡明に Salix serissaefolia の姿態を叙し得て遺憾ない。コブヤナギの方は、「頗ル垂柳ノ態アレドモ、垂柳ノ枝條長ク下垂スルガ如クナラズ」とあって、これは枝先が多少短く傾下しても十分 Salix serissaefolia の変異内に容れうる個体のほかに、コゴメヤナギとシダレヤナギの雑種の内で姿態がコゴメヤナギに近い個体をも含むと解すべきでなかろうか。このような型はコゴメヤナギとシダレヤナギとの交雑、さらに戻し交雑によって両種の形質がいろいろな組合わせとなって出来たのであろう。その微妙な差を慾斎の炯眼よく見て取りコブヤナギとコゴメヤナギの二種に分けたものと考えたい。

【コブヤナギの称呼】これは昆虫により葉に瘤(虫癭)を生ずるイヌコリヤナギや枝條に瘤を生ずるシダレヤナギ・コゴメヤナギ等に与えられたもので、ある特定の種類を指すものとは言えない。それ故混乱を避けるためにも私はコブヤナギの名は敢て採らない。』

表1 コゴメヤナギと広義のシダレヤナギに関連すると考えられる種(品種)一覧

学 名	和 名	備考
	コブヤナギ	飯沼(1832)において、コゴメヤナギに並べて図を描き記述されている一種
S. serissaefolia	コゴメヤナギ	樹形は小枝が斜上して枝垂れない.葉裏は帯白色,子房は基部少毛か無毛
f. pendula	シダレコゴメヤナギ	奥原・松田(1997)に掲載され、コゴメヤナギの枝が下垂する品種とされた
S. serissaefolia × S. babylonica	コゴメヤナギ × シダレヤナギ	生物学御研究所(1980)に掲載され、コゴメヤナギとシダレヤナギとの雑種と思われる、とされた
S. lasiogyne	シロシダレヤナギ	Seemen (1903) により発表され、コゴメヤナギとシダレヤナギの自然雑種と 推定された(木村,1984b). 子房は下半部有毛
S. ohsidare	オオシダレ	木村(1946)により発表されたが、木村(1989)にはとりあげられていない シダレヤナギに比し、葉が大きく、花穂の柄が長いとされる
S. babylonica	シダレヤナギ	枝がよく枝垂れる植栽の標準的タイプから、ほとんど枝垂れないものまでが、 自然繁殖により連続的にみられる、葉裏は帯白色、子房は基部少毛か無毛
f. rokkaku	ロッカクヤナギ	シダレヤナギの品種で,枝が特に長く下垂し,葉が長く枝と平行に垂れる
f. seiko	セイコヤナギ	シダレヤナギの品種で,枝が短く下垂し,葉は小さく枝から広く開出する

#### (2) コゴメヤナギ

飯沼 (1832)『形色全ク前条種ト同ジケレドモ, 葉梢 細ニシテ枝條垂下ノ態ナシ, ソノ葉細キヲ以テ邦俗之ヲ 分テコメヤナギノ名ヲ下ス.』(読点を付加)【前条種とはコブヤナギのこと】

木村 (1984a) 『卒業論文に取り組んでいた 1924年に富士山麓周辺で大木になる一種のヤナギがあちこちにあるのに気がつき,五月に花,六月に果実,十月に成葉を同一株から採り揃えたが,どうしても既知の種にできないため卒業論文には新種として扱った.発表段階(1926)で飯沼慾斎の「草木図説 前編木部巻九」に図説されたコゴメヤナギとコブヤナギとが,特にコゴメヤナギがこの新種に一致するように思われ,牧野富太郎先生に御意見を仰いだところ,慾斎のコゴメヤナギの呼称は葉が小さいことによるものであり,この新種の和名に充てて良いのではないか,との助言を得て,コゴメヤナギとしてSalix serissaefolia Kimuraと命名発表した.』(一部要約)

北村(1977)『日あたりのよい湿地や川岸に生え、よく分枝し、下枝は開出して樹冠は円くなる. 小枝は短く褐緑色、分岐点で折れやすく、若枝は初め灰色の細軟毛がある.

木村博士は S. serissaefolia を発表のとき,「慾斎のコゴメヤナギ?」とし, Science Reports of the Tohoku University Fourth Series, Biology Vol XXVI no.1 (1960) ではこれを,「コゴメヤナギ」としている. コブヤナギはコゴメヤナギと同じとするのも木村博士の見解である.』(一部要約)

木村 (1989) 『樹形がシロヤナギに似た高木で,成葉は狭長楕円状披針形,長さ4-7 cm,幅 9-12 mm,先端はしだいに狭く鋭尖頭,基部は鋭形ないし鈍円形,細鋸歯縁で,表面に光沢があり,裏面は粉白色,両面とも無毛.葉柄は細軟毛をしき,長さ2-6 mm.雌花の苞は黄緑色,楕円形,円頭またはやや切頭,長さ約2 mm,外面は基部にのみ毛がある.子房はやや無柄,基部にのみ毛があるかまたは無毛,長さ1.5-2 mm. 花柱はごく短く,柱頭は線形,長さ0.7 mm 内外で外曲する.』(一部要約)

## (3) コゴメヤナギの品種シダレコゴメヤナギ

**奥原・松田(1997)**『枝が下垂する品種をシダレコゴメヤナギ f. *pendula* Okuhara (f. nov.) という』. 『標本:波田町押出 660 m, (SHIN149851 - 基準標本)』. 【形態の記述はない】

## (4) コゴメヤナギ × シダレヤナギ

生物学御研究所 (1980)『シダレヤナギ × コゴメヤナギ Salix babylonica L. × S. serissaefolia Kimura. 産地,下田市(志戸橋付近). 備考:昭和 50 年,

志戸橋付近の稲生沢川岸には、高さが約14 m、胸高周囲1.9 m や、高さ約14 m、胸高周囲1.48 m の大木を含む3本が、コゴメヤナギとともに生育していたが、昭和50年秋の出水でことごとく流出し、翌春、花の観察ができなかったので、なお疑問は残るが、シダレヤナギとコゴメヤナギとの雑種と思われる。個体により、枝ぶりがシダレヤナギに傾くものや、コゴメヤナギに傾くものがある。』

#### (5) シロシダレヤナギ

木村 (1984b) 『シロシダレヤナギ Salix lasiogyne Seemen は、Otto von Seemen が 1903 年に Salices Japonicae で発表し、引用された標本は Urban Faurie の No.3702 ♀と No.632 ♀であるが、花を解剖した結果、No.632 は花柱の長さと柱頭の形や大きさに於て、原記載の図と全く一致せず、Salix lasiogyne とは別の分類群に属する.

No.3702 は Faurie が相州山北で採集したもので、1935 年に京都大学(KYO)で花穂を解剖し、子房は狭卵形で上端鈍形、下半に疎長毛あり無柄. 胚珠は各胎座に2個. 花柱は短く0.2 mm、柱頭は左右にひらき長さ0.3 mm、先端円状截形往々僅かに凹頭. 苞は単一色で狭い卵状長楕円形、上部は多くは鋭形であるが先端そのものは鈍頭あるいは凹頭であった. しかし、Seemen は原記載の Tafel 4で、苞の先端が鋭尖に近いほど尖った図を描いており、そのようなものはこの解剖では見出し得なかったが、苞の先端の形を除き原記載の図によく合致する、ゆえに No.3702 を Lectotypeとして話を進めて行きたい.

京都大学にある Faurie の No.3702 (Isolectotypus) では、上部中間葉は被針形で先端鋭尖、基部鋭形、両面に長い絹毛を布く. これらの所見から、このヤナギはシロヤナギ節 Sect. Subalbae Koidz. 【シダレヤナギ節のことを示す】に属すること極めて明瞭である.

以上のことを念頭に置き多年 Salix lasiogyne の探索をしてきたが、それと覚しい野生のものに山北付近、富士山麓、松本市付近、下田市付近等で少数ではあるが時々出会い、いずれもシダレヤナギに似てはいるが、枝は短く、傾下または半しだれであり、♀花は大体 Faurie の No.3702 に一致した。そしてこのようなヤナギの出現はいつも人里近い所に限られ、且つコゴメヤナギの分布区域内であった。その枝ぶり、花や葉の形質を合わせ考えると、シダレヤナギとコゴメヤナギとの中間形と言いたくなる。こんな次第で遂に Salix lasiogyne はこれら両種の自然雑種であろうとの考えに到達した。これらは多くは単純な F1 であろうが、また戻し交雑により両種の形質がいろいろな組み合わせとなってできた個体もあるかと思う。今の所シロシダレヤ

ナギはコゴメヤナギの分布区域以外からは見つかっていない.』(一部要約)

長谷川 (1984)『1913年、小泉源一博士は…【中略】…♂の記載を発表しましたが、Type Specimen (Allotype) の指定はなく、産地にもふれていません、粉山先生によれば東大には本種の♂の標本が所蔵されているとのことです』、『本種は駿河、伊豆、相模、武蔵、上総などにまれに栽培されていて、他地域のものは誤認ではないかと思われます。』

**籾山泰一**(1986)『【鶴岡八幡宮】10 株は全部雌株で、10 株とも昭和 52 年鎌倉市文化財に指定された.シロシダレ Salix lasiogyne Seemen は、シダレヤナギに似た柳であるが、枝がさほど長く垂れず、葉が短く、若葉が多毛で、子房の下半に毛があるのを異点とする.最近、シダレヤナギ Salix babylonica L.とコゴメヤナギ Salix serissaefolia Kimuraとの雑種と推定されるようになった。』

長谷川(2003)『シダレヤナギ × コゴメヤナギの雑種.ただし、シダレヤナギ × ジャヤナギの組み合わせの可能性も残る』. 『県内では夷隅郡夷隅町千町街道沿いに雄株と考える 10 株位がある. 樹冠は枝垂れず弓曲するのみである. 鎌倉市【鶴岡八幡宮】の株と樹冠はよく似るが葉は少し違うようである. 雑種群 notomorph の場合はいろいろの形質が生ずる事は多々あると思われる.』

## (6) オオシダレ

木村(1946)『Salix ohsidare Kimura(新種)オホシダレ・吾國の本草學者はシダレヤナギを、屡々オホシダレ、コシダレの二品に分けたが筆者の見解によれば後者は今日我等が稱するシダレヤナギ即ち Salix babylonica L. var. lavallei Dode 【現在は var. babylonica のこと】であり、前者は樹姿シダレヤナギに類するが、枝太く葉は遥かに潤大で業荑花【尾状花】の柄はより長く花柱も亦より長い等の特徴を有し、之は未記載の別の種を形成するものと考へられるので新に上記の學名を與へた.本種は稀に栽植されるものであるが、その起原由來に關してはまだ閾明されて居ない.』

**北村 (1979)** 『青森栽培の雄本を Type として、オオシダレ S. ohsidare Kimura を発表したが【木村1946】、これは木村博士によればシダレヤナギと他種との雑種かもしれないという。枝が太いのと、成葉が広く大きいのでシダレヤナギと区別する。』

大井 (1983) 『枝がやや太く,葉は長さ 10–20 cm,幅 2.3–4 cm,花穂は長さ 5–8 mm の梗があり,花柱はわずかに長い. 』

## (7) シダレヤナギ (イトヤナギ)

飯沼 (1832)『枝條細長垂下スレドモ,質脆フシテ折

レ易キコトコブヤナギノ如ク、又コブヤナギノ如ク処々ニ結節アレドモ、彼ノ如ク大ナラズ、・・【中略】・・一種大葉ニシテ濶一寸余長七八寸ニ及ブモノアリ、之ヲオホシダレトイフ、・・【中略】・・又近世所傳西湖ノ種ハ葉形大ナラズ枝條長ク垂レテ地に延ク【後略】』(読点を付加)

北村(1977)『中国原産の落葉高木,一般に並木に植えられているが水に近いところによく育つ. 太い枝は斜上または開出するが,細い枝は下に長く下垂する. 若枝の先は細軟毛があるが後無毛,淡黄緑色でやや光沢がある. 本州・四国・九州に広く栽培される.

慾齋のいうオオシダレは稲生若水がつけた名で、小野 蘭山の啓蒙にもあるが、現在京都にはみられず、京都の 植木職がオオシダレというのはロッカクヤナギであり、 慾齋が西湖種とするもの f. seiko Kimura とはちがう ようで、後者は枝があまり長くならない【後者はセイコ ヤナギのこと】.』(一部要約)

木村 (1989) 『若葉はやや無毛あるいは圧軟毛を散生する. 成葉は長さ8-13 cm,幅1-2 cm,無毛で披針形ないし線状披針形,先端はしだいに狭くなり鋭尖頭,基部は鋭形,細鋸歯縁,表面は濃緑色,裏面は粉白色.葉柄は上面に溝と細軟毛があり,長さ5-10 mm.雌花の苞は淡黄色で卵状楕円形,外面の基部に毛があり,長さ1.5-2 mm.子房は卵形で無柄,基底に微毛があるがほかは無毛,長さ約2 mm,花柱はひじょうに短く,柱頭はやや肥厚し、倒卵形で円頭ないしやや凹頭.

寒気に弱いが、札幌市付近までは植栽が可能である. それより北でシダレヤナギのように見えるものは、シロヤナギとの雑種と思われる.【ユウキシダレのこと】

ロッカクヤナギ (六角柳) f. rokkaku Kimura は. 枝が特に長くて垂直に枝垂れ, 葉は線状披針形で葉身が枝とほぼ平行に垂れる.

セイコヤナギ (西湖柳) f. seiko Kimura は、枝があまり長くならず、葉はやや小さくて枝から広く開出する.』 (一部要約)

長谷川 (2003) 『きわめて多形で系統も多く,他種との雑種個体と考えられるものがあり(例:シロシダレヤナギ,セイコヤナギ),枝垂れの程度にも色々の段階がある.

中国原産で現地では野生の立性の個体群(タチシダレヤナギと新称したい)があり、その突然変異体であるシダレヤナギは、選別され栽培品として賞用され拡がったものと思われる.

狭義のシダレヤナギ:葉は跳ね出すのでふくらみ形に 枝からやや離れて下垂する.葉柄のねじれは中程度.

ロッカクヤナギ:節間長く、葉は長さ10-20 cmで枝にほぼ密着して平行に垂れる。葉柄はやや長くねじれは強い、枝は長く垂下し、土用芽もまた長く枝垂れる。枝は放置すれば地面に達しさらに横に這う。樹姿は両肩上がりの横張りとなる。

セイコヤナギ:節間短く、葉は短く枝から跳ね出す. 葉柄は短くねじれない。春先伸びる枝では枝の両側に葉が水平に並び180度葉序となる。垂直に垂れた枝では枝の全周に葉がつく。枝はシダレヤナギ【狭義】のように長く垂下しないのが普通であるが、まれに長く垂下する。シダレヤナギの品種とされているが、前2品【狭義のシダレヤナギとロッカクヤナギ】とは大いに異なり、雑種の可能性がある。

シダレヤナギが先祖返りして枝垂れない野生形となった型を、タチシダレヤナギ (新称) form. *spontanea* (forma nov.) Hassegawa nom. nud. とし、種子繁殖からごくまれに出現するようである.』(一部要約)

#### 考 察

### (1) コゴメヤナギ (コブヤナギを含む)

本種は樹形や葉形が似ているシロヤナギや、ヨシノヤ ナギなどとまぎれることがあるが、それ以前に枝垂れな いシダレヤナギとの区別が必要となる. コゴメヤナギを 探求すると、樹冠外側の枝先が多少枝垂れる個体に対し、 広義のシダレヤナギ(イトヤナギ)との雑種ではないか という疑問が生じることがしばしばある. 枝の傾下や枝 垂れ方のどこまでをコゴメヤナギを考慮に入れて考える かは、なかなか悩ましく多少の経験が必要である. 飯沼 (1832) によれば、草木図説のコブヤナギの項で、『垂 柳ノ態アレドモ, 垂柳ノ枝條長ク下垂スルガ如クナラ ズ』. 同じくコゴメヤナギの項で、『葉梢細ニシテ枝條垂 下ノ態ナシ』と書いている. 木村 (1984a) はこれらを 引用した上で、『これは枝先が多少短く傾下しても十分 Salix serissaefolia の変異内に容れうる個体のほかに、 コゴメヤナギとシダレヤナギの雑種の内で姿態がコゴメ ヤナギに近い個体をも含むと解すべきでなかろうか』と して、慾斎の考えるコブヤナギをコゴメヤナギに含める 見解を述べている. 北村(1977)によれば、『コブヤナ ギはコゴメヤナギと同じとするのも木村博士の見解であ る』と記している.

筆者はこの見解を、コゴメヤナギとシダレヤナギを考える上での実用的な扱い方として支持し、実際に用いている.

### (2) シダレコゴメヤナギ

コゴメヤナギの品種として掲載した長野県植物誌によれば、『解説は必ずしも形態的な記載とはせず、話題性を重視した』と記され、形態の記述はほとんど与えられていない。本品種の詳細が記載されている文献を筆者はみていないため、枝垂れ方が少ないタイプのシダレヤナギとの区別、慾齋のコブヤナギとの区別、シロシダレヤナギとの区別などについてはうかがい知ることができない。学名など長野県植物誌から引用される例をときにみ

るが、独立した分類群として認識できるものか、現状で は判断できかねるものと考える.

#### (3) コゴメヤナギ × シダレヤナギ

掲載された生物学御研究所(1980)によれば、花の形状には言及しておらず、雑種と判断できるような形態の記述もない。分類群として認める段階ではないと考える。

#### (4) シロシダレヤナギ

木村(1984b)によれば、本種をコゴメヤナギとシ ダレヤナギの自然雑種であろうと推定しているが、判 断を下すのに半世紀に及ぶ研究を重ねている. Seemen (1903) の Salix lasiogvne の図には子房の下半部に 毛が多数描かれ、子房の毛の状態は本種の重要な特徴 の一つとなっている. 広義のシダレヤナギ (イトヤナ ギ) もコゴメヤナギも、子房は無毛か基部や底部にやや 少数の毛を持つ場合がふつうで、S. lasiogyne が両種 の交雑種だとするなら子房下半部の多数の毛の存在が説 明できないことになる. 長谷川(2003)がシダレヤナ ギ × ジャヤナギ S. eriocarpa Franch. et Savat. の組 み合わせの可能性も残ると述べたのは、このことが理由 であろう. 片親が子房多毛のものだと仮定すれば、木村 (1984b) の推定どおりシダレヤナギとコゴメヤナギの 組合せであるなら、両親のどちらかが子房多毛のタイプ であることになり、木村博士の推定と異なる組合せであ るなら, 交雑相手は子房が多毛となる別種であったと考 えられる. 以上のことを念頭におき,神奈川県鎌倉市(鶴 岡八幡宮)のシロシダレヤナギとされる個体群について, 観察結果を以下に記す.

鎌倉市のシロシダレヤナギの樹形 (図 1) は、枝が短く枝垂れて広義のシダレヤナギ (イトヤナギ) に似た部分もあるが (図 2)、コゴメヤナギのように枝垂れない部分もみられ (図 3)、樹形は両者を混合した形状をとる、枝の太さも同様でやや中間的である。新葉はコゴメヤナギの葉に似てやや毛が多く、葉形はシダレヤナギ (図 4)と似ているが、コゴメヤナギの葉形とも重なる (図 5)、幅の広い葉もみられ、この点ではシダレヤナギとシロヤナギの交雑種である可能性も感じさせる (図 6).

2011年5月2日、おびただしい数の雌花穂が地上に落下し、その子房を観察するとすべて膨らんでいなかった。また枝に残る雌花穂も少数ではあるが観察することができたが、子房が膨らんでいるものはみられなかった。子房の毛は下半部から基部にかけて有毛で、ふつうは多毛であるがときに少毛の場合もあり、シロヤナギなど子房多毛の種(図7)とシダレヤナギやコゴメヤナギなど子房少毛の種(図8、9)との交雑の可能性を感じさせる(図10)、類似種の雌花の主な形質を表にまとめた(表2)、鎌倉市の個体の雌花穂の長さはコゴメヤナギやシ

表2 雌花の各部分の長さと子房の毛

(単位 mm)

学 名	和名	雌花穂	花 柱	柱 頭	子房の毛
S. jessoensis	シロヤナギ	20-30	0. 2-0. 4	0. 5-0. 8	全面-下半部多毛
S. serissaefolia	コゴメヤナギ	10-20	0. 2-0. 5	0. 3-0. 5	基部少毛-無毛
S. babylonica	シダレヤナギ	11-20	0. 2-0. 5	0. 3-0. 6	基部少毛-無毛
S. lasiogyne	シロシダレヤナギ (木村 1984b)		0. 2	0. 3	下半部多毛
S. lasiogyne	シロシダレヤナギ(鎌倉市の個体)	12-17	0. 2-0. 4	0. 5-0. 8	下半部多毛-少毛

注:木村(1984b)以外の数値は筆者のノートによる

ダレヤナギに近かった。柱頭の長さは、木村(1984b)の記述や Seemen(1903)の Salix lasiogyne の図と少し異なり、シロヤナギに似てやや長い。子房の毛の状態、柱頭の長さなどを考慮すると、ユウキシダレ  $S. \times yuhkii$   $Kimura(シダレヤナギ \times シロヤナギ)の可能性も考えられる。また、背腺体を持つ花を <math>1$  個確認しているが(検証花穂 3 個 2013/4/4)、ちなみにシロヤナギの雌花にも背腺体がまれにみられる。

以上のように、野生の枝垂れないシダレヤナギ(イトヤナギ)とコゴメヤナギとの関係は、雄花も雌花もよく似ているため、葉の形質や枝や枝振りの違いなどで区別されるが、交雑種となると基本種との違いを明確に示すことは困難で、納得させられる外見的形状を提示することは難しい。シロシダレヤナギは形態や生態による視覚的分類では解明できかねる分類群であり、今後のDNAを直接比較する分子系統学的手法などでの解明が待たれる。今のところシロシダレヤナギは雑種であろうと推測するのみである。

したがって野外に生育する個体を Salix lasiogyne Seemen と同定可能なのは、Seemen(1903)の原記載と一致する子房の形状、つまり子房下半部が有毛となる雌株個体の場合のみとなる。

## (5) オオシダレ

東京都葛飾区の江戸川右岸に葉の大きな広義のシダレヤナギ (イトヤナギ) の雄株が数株あり、花穂の柄は長く5-11 mm、葉の長さ110-160 mm、幅は23-28 mm に達し、十分オオシダレの範囲内に入ると考えられる個体を観察しているが、狭義のシダレヤナギ (植栽の標準タイプ) と明確に区別できるだけの違いを筆者は認識できていない。

オオシダレは雌株が木村(1946)により発表され、雄株が Kimura(1958)により発表されたが、日本に自生する種がほぼ網羅されている木村(1989)の掲載種には含まれていない、雑種またはシダレヤナギのシノニムと考えられていた可能性がある。北村(1979)によれば、シダレヤナギが関係する雑種かも知れないとの考えが木村博士にあったことが述べられている。また、

Ohashi (2000) によれば、オオシダレはシダレヤナギ のシノニムとして扱われている.

以上のことから本種はシダレヤナギの一型と考えるのが妥当であろう. なお, 北村(1977, 1979)によれば, 飯沼(1832)に記述のあるオオシダレとされるものとは, 異なるものだとされている.

## (6) シダレヤナギ (イトヤナギ)

主要な文献では、枝が長く枝垂れる狭義のシダレヤナギ(植栽の標準タイプ)を中心に記述し、ロッカクヤナギ、セイコヤナギ、オオシダレなどが樹形や葉形の特異さから特徴が述べられている。ロッカクヤナギは Kimura (1978) により、セイコヤナギは Kimura (1958) により発表され、ともにシダレヤナギの品種とされている。これら品種類は雄花や雌花の形質では区別できず、しばしば学び手を悩ます要因ともなっている。

ロッカクヤナギとセイコヤナギは東北大学植物園と筑 波実験植物園で雄株がみられ、筆者の観察結果をまとめ ると以下の通りである.

ロッカクヤナギ (仙台市・東北大学植物園・雄株, つくば市・筑波実験植物園・雄株, 図11)

垂直に下垂する枝の葉は (図 12-14), 葉身中部から 葉先にかけて垂直に下がる. 雄花の苞は狭長卵形で, 植 栽の標準タイプよりも細長い傾向であった (仙台市・つ くば市). 腺体は合着するものがみられた (仙台市). そ のほかは植栽の標準タイプと, 明確に区別できる違いを 筆者は認識できなかった

セイコヤナギ(仙台市・東北大学植物園・雄株,つくば市・筑波実験植物園・雄株,図 15)

若葉はやや全縁. 成葉の主脈は植栽の標準タイプと同様に両面に凸出するが、表面主脈は細い. 垂直に下垂する枝の葉は (図 16-18)、葉身中部から葉先にかけて斜めに広い角度で下垂する葉が多いが、ときに葉身中部から葉先にかけて垂直に下がる葉もみられる. 葉柄, 雄花, そのほかは、植栽の標準タイプと明確に区別できる違いを筆者は認識できなかった.

仙台市のセイコヤナギとロッカクヤナギを比較する と、枝や葉の下がり方や、葉の長さなどで区別できそう に思えたが、つくば市の両種をふくめて考えると区別の 線引きは難しく、多くの個体をみるほど違いは連続して しまうように思える。また品種間で異なるとされる葉柄 のねじれは、葉の表面を陽光に向けるための形質で(図 19)、樹木全体における葉の位置によっても変化がある。

長谷川(2003)はシダレヤナギの由来について、野 生の立性個体から枝垂れ形質を持った突然変異体が選別 され、栽培品として我国に導入され広まったのではない かと推測している. この考えに従うなら, 野外で自然交 配が繰り返されれば、全く枝垂れないタイプから、よく 枝垂れるタイプまでが混在することは必然であり、各品 種は種内変異の極端品とも考えられ、明確な線引きがで きないことは理解できる. シダレヤナギについて典型品 ごとに細分することは分類上の混乱の要因となるばかり であり、一括して広義のシダレヤナギ (イトヤナギ) と して扱うのがよいと考える. ロッカクヤナギとセイコヤ ナギはいずれも岩崎灌園の「本草図譜」(岩崎, 1828) の中にある柳に同定された著名な樹種であるから(北村, 1979)、話題性を中心とした取り扱いを除けば、各地の 植物相調査や分類学検討の対象とはしない方がよいと考 える.

広義のシダレヤナギで最も悩ましいのが枝先の状態で、幼個体は枝垂れないことが多く、野生の若木や中型の木でも枝垂れない場合は、それらを雑種あるいはコゴメヤナギと想定されることがあり、結果として誤同定に至る例も散見される。このような若い個体は、同定の対象としないかまたは慎重な対応が求められる。なお、岩崎(1828)の年号についてははっきりせず、ここではKimura(1958、1978)、北村(1979)などで用いられている出版年(1828)を仮に採用する。

## 和名イトヤナギの提言

シダレヤナギにおける大きな問題の一つは、枝が長く枝垂れる植栽の標準タイプに対して与えられた「シダレヤナギ」の和名が、枝垂れない個体に対しても用いられることである。枝垂れない個体にシダレヤナギの呼称は樹形に相応せず、違和感を覚えるのは筆者だけではないと思う。和名「シダレヤナギ」の呼称は、植栽されている枝が枝垂れる個体のみに用い、広義の Salix babylonica L. の呼称は、これまで別名として多く用いられてきた「イトヤナギ」を和名として使用することを提言する。

#### 謝 辞

南浜野生植物調査室の長谷川義人先生には、本稿に関

わる貴重な文献のコピーなどを賜りました. 兵庫県立 人と自然の博物館の秋山弘之先生には,多くのご教示に 加えて本稿の構成などについて貴重なご助言を賜わりま した. 査読の先生方には大変有効なご指導ご教示を賜り ました. そのほか博物館のスタッフ,東北大学植物園や 筑波実験植物園の関係者など,本報告をまとめるにあた り深く感謝申し上げます.

## 文 献

- 長谷川義人 (1984) 由来不明の柳・シロシダレヤナギ. 牧野植物 同好会誌 MAKINO, **6**, 5.
- 長谷川義人 (2003) ヤナギ科 Salicaceae. 千葉県の自然誌別編 4 千葉県植物誌, 千葉県, 千葉, pp. 86-99 & 102-105.
- 飯沼慾齋 (1832) 草木図説 後篇 木部 巻九, [国立国会図書館デ ジタル資料 10 巻(11)] 第 2 目.
- 岩崎灌園 (1828) 本草図譜 巻 84, [国立国会図書館デジタル資料] 目録:15-16.
- 木村有香 (1946) 楊柳学貢献 第九報. Bot. Mag. Tokyo, **59**, 79-90.
- Kimura A. (1958) Symbolae Iteologicae XVI. Sci. Rep. Tohoku Univ. 4 Ser. Biol., 24 (3), 113–118 + pl. 1–4.
- Kimura A. (1978) Spicilegia Iteologica I. J. Jpn. Bot., 53, 193–201.
- 木村有香 (1984a) 飯沼慾斎と楊柳. 飯沼慾斎生誕二百年記念誌編集委員会編, 飯沼慾斎, 飯沼慾斎生誕二百年記念事業会, 岐阜, pp. 105-120.
- 木村有香(1984b)シロシダレヤナギについて. J. Jpn. Bot., **59**, 270-271.
- 木村有香 (1989) ヤナギ科 Salicaceae. 日本の野生植物 木本 I, 平凡社, 東京, pp. 31–51., pl. 39–58.
- 北村四郎編註·飯沼慾齋原著(1977)草木図説 木部 下, 保育社, 大阪, pp. 702-713 & 973-987.
- 北村四郎(1979)やなぎ科 Salicaceae. 北村四郎・村田源(編), 原色日本植物図鑑 木本編Ⅱ, 保育社, 大阪, pp. 303-340., pl. 124-129.
- 籾山泰一 (1986) 鎌倉市域の植物. 鎌倉市教育委員会編, 鎌倉市 文化財総合目録 地質動物植物篇, 鎌倉市, 鎌倉, pp. 167– 182.
- 奥原弘人・松田行雄 (1997) ヤナギ科 Salicaceae. 長野県植物誌 1997, 信濃毎日新聞社, 長野, pp. 532-546.
- Ohashi H. (2000) A Systematic Enumeration of Japanese Salix (Salicaceae). *J. Jpn. Bot.*, **75**, 1–41.
- 大井次三郎著 北川政夫改訂 (1983) Salicaceae ヤナギ科. 新日本植物誌 顕花篇,至文堂,東京,pp. 527-542.
- Seemen O. von. (1903) Salices Japonicae. Gebrüder Borntraeger, Leipzig, 83pp., 18pls.
- 生物学御研究所編 (1980) ヤナギ科 Salicaceae. 伊豆須崎の植物, 保育社, 大阪, p. 73.

(2015年7月31日受付) (2015年10月27日受理)

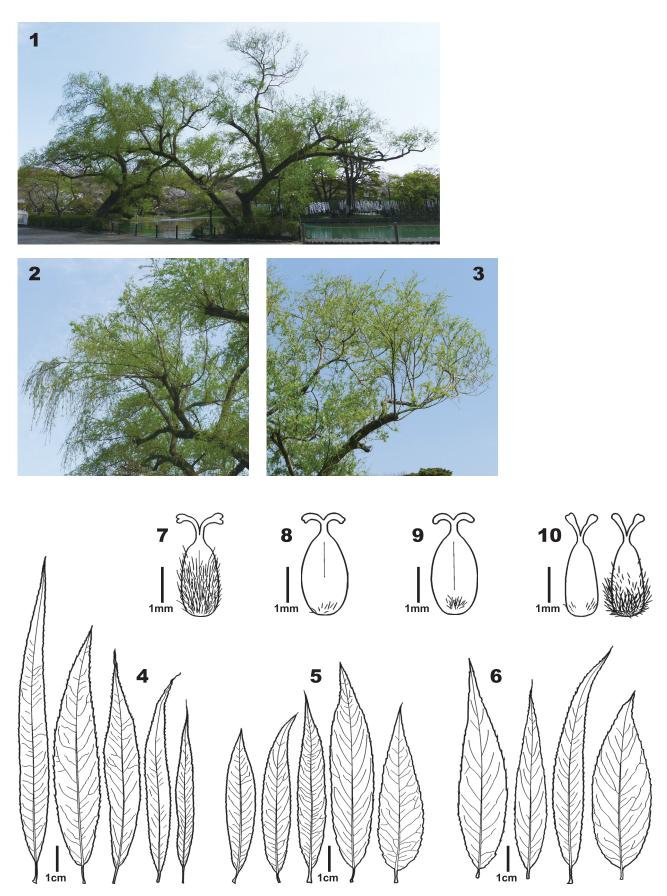


図 1-10 1-3, 6, 10:鎌倉市のシロシダレヤナギ.

1:樹形 (2013/4/4). 2:短く枝垂れる枝. 3:斜上および直立する枝.

4:シダレヤナギの葉. 5:コゴメヤナギの葉. 6:シロシダレヤナギの葉.

7:シロヤナギの子房. 8:シダレヤナギの子房. 9:コゴメヤナギの子房. 10:シロシダレヤナギの子房.

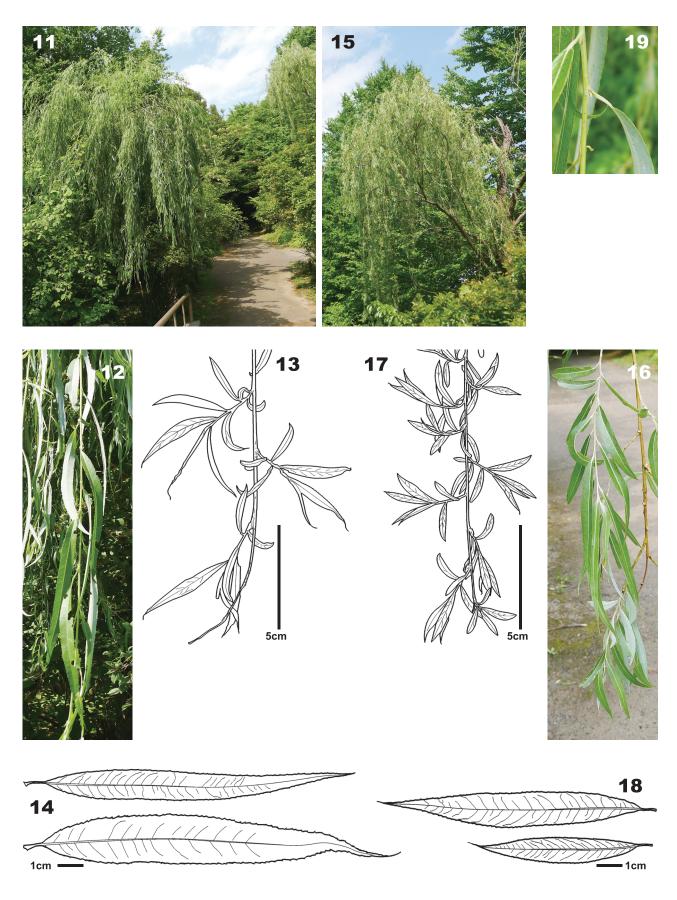


図 11-19 11-14:ロッカクヤナギ. 15-18:セイコヤナギ.

11: 樹形(つくば市 2012/7/19 右上はセイコヤナギ)。12: 下垂する枝葉。13: 出葉時の下垂する枝。14: 葉.

15:樹形(つくば市 2012/7/19). 16:下垂する枝葉. 17:出葉時の下垂する枝. 18:葉.

19:シダレヤナギ 下垂する枝の葉の葉柄部分 (葉表を陽光に向けるため 180 度ねじれる).

(図11,図15のいずれも、主幹が折れ端正な樹形ではないが、枝の枝垂れ方での区別はつかない)